

「戦争」という言葉が毎日のように新聞やニュースで飛び交っているのに、その言葉は私たち中学生にとって、宙を舞っているような感覚で聞こえてしまいます。同じ地球に住む、私たちと同世代の仲間が心を痛め、苦しみ、涙を流しているというのに、どこか他人事に感じてしまっているのかもしれない。しかし、テレビで見る悲惨な状況は今、確実に起きていることであり、決して私たちにとって他人事に感じてはならないことなのです。

そのことを実感する出来事がありました。それは、昨年度のことです。私たち真室川中学校の生徒全員に一冊の本が送られました。タイトルは『見捨てられた戦場』です。

私はこれまで何冊も戦争についての本を読んできましたが、この本は特別な一冊でした。私に、真室川町の方が体験した戦争を教えてくださいました。雪深いここ真室川で平和に暮らしていた男性が戦争に徴収され、ニューギニアのサルミという、慣れない熱帯の地での悲惨な状況が語られていました。「戦争」という名のもと、感情を失い、人を殺めてしまう過酷な状況で傷つき、最期を迎えようとしてる仲間に、せめて魂だけでも故郷に帰してあげたいという、人間の優しさも記されています。どちらも同じ人間がやっている行為だと思えば思うほど、言葉を失い、ページを進める手が何度も止まりました。

印象的だったのは、終戦間近、異国の地で食べるものも生きる望みも何もない中で、幼いころから聞いた昔語りをして励まし合ったというシーンです。その語りを聞いた人も一生懸命語った人も、その瞬間はただ「生きる」ことだけに懸命な様子が伝わってきました。

でも、私たちはこの「戦争」を昔語りにはいけません。私たちが大人になる頃には、この日本で戦争の経験を語れる

人はごくわずかになっているでしょう。そして、それと共に戦争の記憶は薄れていく……それでは、この平和の尊さを感じることもなく、ともすれば、戦争が繰り返されてしまうこともあるかもしれません。そうならないためにも、記憶の継承をしていくことはとても大切なことだと思います。本の帯に合った「戦争を知らない君たちへ」という言葉は、今ある私たちの平和がどのような歴史を経て辿り着いたもののかを学び、この平和を守り抜く責任、思いを受け継ぐということなのではないかと感じました。そしてそれは日本にとどまらず、世界中につないでいくことが、私たちに託されているのだと思います。

先月行われた「G7広島サミット」にて、ウクライナのゼレンスキー大統領はこう示していました。

「現代の世界に、核による脅しの居場所はない」

一刻も早くこの地球上から「戦争」が消え、世界中の子どもたちの笑顔を取り戻すことができるよう、「平和」を守り築き上げていくために私たちができることは何なのかを考え続けることを誓い、戦争で亡くなられたすべての皆さんのご冥福をお祈り申し上げます。